はじめに

本講義は私大最難関である早稲田大学合格を目標とする講座です。

早稲田の現代文といえば

「本文が抽象的で難解だ」
「選択肢が微妙で紛らわしい」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って真偽判定をしていけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「早稲田の現代文は難しい」

という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき

「早稲田の現代文が日本で一番簡単だ」

と思えるように講義をしていきます。

この秋、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係か

らなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「4つの言葉のルール」と「4つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の4つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も4つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

秋期講習では「制限時間アリ」で問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　制限時間内に問題を解く。解答の根拠に線を引く。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント
講義中はメモを取らない。説明や図は復習タイムでノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**復習ポイントを覚える。問題を解き直す。**

早大 現代文　目次

第一講　早稲田大学　過去問演習①……p.8
第二講　早稲田大学　過去問演習②……p.22
第三講　早稲田大学　過去問演習③……p.34
第四講　早稲田大学　過去問演習④……p.46

第一講　早稲田大学　過去問演習①　30分

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私たちは、自分や他人が生きているとはどういうことかを知っている。それは必ずしも、私たちが「生きているとはどういうことか」を説明できるとか、まして「生命とは何か」といった問いに言葉で答えることができるということではない。そんな語彙を知らなくても、子どもが昆虫採集や魚釣りに夢中になれるのは——そうした遊びの機会は急速に失われつつあるけれど——生きているものとそうでないものとを直観的に区別しているからだ。

たぶん子どもたちにとって最初の手がかりは、生き物は勝手に動くということだろう。だがそれがすべてではない。かたちも重要だ。生き物は生き物らしいかたちをしている。それに加えて、身近な人間たちや、犬や猫に触れた手に感じられる独特の柔らかさや暖かな鼓動から、子どもは何かが生きているとはどういうことかを学んでゆく。まだ「生命」とか「いのち」とかいった抽象観念はもっていなくとも、いやむしろそれゆえにこそ、

子どもは何が生きているのかを知っているのだ。

［　A　］

ここで注目すべきは、応答するはずのないもの、すなわち生命をもたない相手に対しても、子どもはためらうことなく呼びかけるということだ。典型的なのはクマのぬいぐるみや着せ替え人形に対する態度である。子どもがいつも腕に抱えているクマのぬいぐるみに「タロちゃん、お散歩にいきましょ」等々と話しかけるとき、その呼びかける声の消失点である「タロちゃん」は、単なる［　B　］事物ではなく、顔をもった人称的存在者――そのような存在者をここでは「誰か」と表記しよう――である。そしてそのことは、[1]<u>子どもにとって、タロちゃんが生きているということからまだ区別されてはいない。</u>私たちは大人になる過程のどこかで、ぬいぐるみは生きていない――したがって、生きているものと同じように取り扱う必要はない――ということを憶（おぼ）えるのである。

ただし厳密には、「生きていない」という表現のこの使い方は不正確である。何かが生きていないという言い方を私たちがするのは、かつては生きていたものが死んでしまって、もはや生きてはいない、という場合がほとんどなのではないだろうか。はじめから生きてはいないものについては、むしろ「生き物（生物）ではない」や「生命（いのち）をもたない」とい

うように、「生き物」「生命」という名詞によって述語づけることがふつうなのではないだろうか。

反対に、何かが生きているという言い方をする場合、そのときの主題はその何かが生物であるか無生物であるかではなく、生物であることはすでにわかっている何かが（ある時点で）生きているのか死んでいるのかという対比であることが多いように思われる。「鼠は生きているが、消しゴムは生きていない」というよりも、「鼠は生き物だが、消しゴムは生き物ではない」という方が自然な言い回しであろう。

このように、大人たちにとっては、何かが「生き物である」「生物である」ということがまずあって、その次にその何かが「生きている」のか、それとも死んでいるのかが問題となるのである。子どもの世界観と比べたとき、[2]このことがもつ意味は両義的である。言葉よりも前に子どもが理解する感覚を表すのに適切なのは、すでにみたように、「生きている」という言い回しの方だ。「生き物」や「生物」といった名詞的[a]ハ握、ましてや「生命」や「いのち」といった抽象観念が子どもに到来するのは、ずっと後のことである。しかしそうした観念に精神を侵されてしまった大人はこの順序を転倒させ、まず「生物／無生物」という軸で世界を腑分（ふわ）けした後で、さらに生物についてだけ「生きている／死んでいる」という弁別の述語を

与えるのだ。

けれども、そのように転倒したやり方であれ、私たちが「生き物である／ない」という表現と「生きている／死んでいる」という表現を微妙に使い分けられるという事実には、子どものときにはじめて何かが生きているということの意味を体得した、その原初的な感覚の残響を聞き取ることができるように思われる。それと併せて、子どもにとって生きているものとは［　C　］ではなく［　D　］なのだったことを思い起こしてみよう。私たち大人もまた、自分にとって大切な人の生死の分かれ目に遭[b]グウするときには、そのような感覚を思い出すのではないか？

たとえば、自分の愛する人が脳死状態に陥ったとき、その傍らに立つ私たちは、たとえ脳死状態が人の死であると考えていたとしても、その人に何ごとかを呼びかけるだろう（「お母さん」「太郎さん」「辛かっただろうね」「なんで死んじゃったの」等々）。それは相手をいまだ単なる物体ではなく「誰か」——すなわち、世界の開けの原点であると同時に、私からみれば世界の消失点でもあるような他者——であると認めることである。いや、脳死者ではなく、いかなる意味でもすでに死んだ他者について考えてみてもよい。死んだ直後の「死者」は、文字通り「死んだ者」であって、いまだ「死んだ物」すなわちモノとしての「死体」ではない。

右のような場景に示唆されているように、私たちにとって意味のある「他者」の本質とは「生命」などではなく、それが「　E　」であるということなのである。言い換えれば、「物」ではなく「者」であるか否かが問題なのだ。

生命科学や生物学の土台には、生きているという事態を「生命」という名詞で表される観念へと抽象する、「生命のフェティシズム」がある。そのような知の枠組みの内部で見出される「生命の本質」なるもの――「自己複製能力」や「動的平衡」といった観念、あるいは「生命とは遺伝子である」というたぐいの言い回し――は、かつて私たちが感受した「誰々が生きている」という原初的な事実からあまりにも遠く隔たっている。果たしてそれは、私たちが何かに触れて感じる「生きている」という感触と、本当に同じものを指しているのだろうか。

誤解してほしくないのだが、私は科学としての生物学や生命科学を否定しているのではない。分子遺伝学が日々更新しつづけてくれているＤＮＡ・ＲＮＡワールドの目眩（めくるめ）く精緻なメカニズムや、進化生物学が解き明かす自然のダイナミクスは知的興奮をかきたててくれる。むしろ「生命」は生命科学の特権的なフィールドであってよい。そのことを認めたうえで、私がいいたいのは、私たちが人の生死をめぐって倫理を問う場面では、「生命」

という観念は本質的な意義をもたないということだ。[3]倫理の問いは、「生命」の問いではない。それは「誰かが生きている」、「誰かがいる」という事実をめぐる問いでなければならない。

たとえ生命があっても、それが私たちにとって呼びかけの対象たりうる「誰か」でないのなら、そもそも倫理の問いが立ち上がることさえないだろう。問題をはっきりさせるために、極端な事例をとりあげてみよう。「生命」という概念の適用限界にある存在者として、コンピューター上を走る各種の「人工生命」がある。「生命」である以上、コンピューターの電源を切ることは、それを「殺す」ことであるはずだ。だがおそらく、人工生命を消滅させることをめぐる倫理的是非を真剣に考えている人はまずいないだろう。「人工生命」は、ある抽象的な意味では「[F]」ではあるのかもしれないが、人間にとっての生きている「[G]」からはかけ離れた存在者——とさえいえないような[H]——でしかないからだ。

他方、鉄腕アトムやドラえもんやロボコンのように人間と言葉を交わし、人間とともに生活するロボットが実際にいたとしたら、たとえかれらが「生命」をもってはいないことを頭では理解していたとしても、私たちはかれらをむやみに破壊することはできなくなる。たとえば、浦沢直樹の漫画『プ

ルートウ』で主人公のアトムが敵によって機能停止されたとき、読者はアトムが「死んだ」あるいは「殺された」と感じずにはいられない。しかしアトムの死を悲しむのと同じ人が「アトムには生命があったのか」と問われれば、たぶん口ごもるだろう。「そんなことはどうでもいい」と怒り出すかもしれない。ここには何も矛盾はない。アトムに生命があろうがなかろうが、そんな抽象概念にはるかに先立つ次元で、アトムは確かに私たちのあいだで生きていたのであり、したがって死ぬこともできるのである。それはすなわち、アトムが私たちにとって［　I　］的な「誰か」であったということにほかならない。

（加藤秀一の文章による）

問一　傍線部ａ・ｂにあたる漢字を含むものを、それぞれ次のイ〜ホの中から一つ選び、答えよ。
傍線部ａ　イ　大雑パ　ロ　ハ気　ハ　ハ遺　ニ　論パ　ホ　老バ心
傍線部ｂ　イ　辺グウ　ロ　配グウ者　ハ　グウ話　ニ　待グウ　ホ　グウ司

問二　空欄［Ａ］には、次のⅰ〜ⅳの文を並び替えた文章が入る。正しい順番を、イ〜ニの中から一つ選び、答えよ。
ⅰ　この世界に生まれ落ちた子どもは、まず親や周囲の大人たちからの呼びかけに応え、逆に呼びかけることを身につけてゆく。
ⅱ　言語がコミュニケーションの道具として進化してきたのだとすれば、それは当然のことだろう。
ⅲ　子どもにとって、生きているものとは、それに対して呼びかけうる、あるいは呼びかけてしまう対象のことだ。
ⅳ　そしてそれは同時に、誰かに呼びかけることを学ぶということでもある。
イ　ⅰ・ⅲ・ⅱ・ⅳ　ロ　ⅱ・ⅲ・ⅳ・ⅰ
ハ　ⅲ・ⅱ・ⅳ・ⅰ　ニ　ⅳ・ⅱ・ⅲ・ⅰ

問三　空欄［Ｂ］に入る最も適切な語句を、次のイ〜ホの中から一つ選び、答えよ。
イ　のっそりとした　ロ　どっしりとした　ハ　あっさりとした
ニ　ひっそりとした　ホ　のっぺりとした

問四　傍線部１「子どもにとって、タロちゃんが生きているということからまだ区別されてはいない。」とあるが、これはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、答えよ。
イ　子どもにとってタロちゃんは、犬や猫と同様に生きていて、呼びかけうる存在だということ。
ロ　子どもでもタロちゃんが生命をもたないことは知っているが、つい呼びかけてしまうということ。

ハ　同じ生きている存在でも、犬や猫とタロちゃんとでは、子どもでも自然に区別しているということ。
ニ　子どもにとってタロちゃんは生きているから、犬や猫と区別して扱う大人の態度が理解できないということ。
ホ　子どもにとって、タロちゃんが生きているとか生きていないとかいう区別は、呼びかけの対象としては無関係だということ。

問五　傍線部2「このことがもつ意味は両義的である。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、答えよ。

イ「生きている」ことに関する大人の理解は、まだ未熟な子どもの世界観とは正反対だが、大人も昔は子どもだったことを思い出せば、子どもの理解の仕方に共感できる点もあるということ。
ロ「生きている」ことに関する大人の理解は、「生物／無生物」で分類したのち生物についてだけ「生きている／死んでいる」と判断する流れだが、脳死の人を前にした時の行動は、往々にしてその逆の流れになるということ。
ハ「生きている」ことに関する大人の理解は転倒していて、名詞表現から動詞表現のとらえ方へと進むが、動詞と名詞の表現を微妙に使い分けられる点では、子どもと共通の純粋な感覚をいまだ持ち合わせているということ。
ニ「生きている」ことに関する大人の理解は子どもとは違っていて、もはやぬいぐるみを生き物と取り違えたりはしないものだが、生命の大切さを子どもに教えるために、故意に無生物を生物扱いして見せることもあるということ。
ホ「生きている」ことに関する大人の理解は、対象が生物であるか否かという理性的な判断に基づくが、子どもの理解はその逆で、生物無生物にかかわらず、対象が自分にとって誰かであれば仲間とみなすのが普通の感覚だということ。

問六　空欄［C］～［H］には、「何か」「誰か」「生命」のいずれかが入る。それぞれに入る語として最も適切なものを、次のイ～ハの中から一つずつ選び、答えよ。

イ　生命　　ロ　何か　　ハ　誰か

問七　傍線部3「倫理の問いは、「生命」の問いではない。」とあるが、ここで著者が言いたいことはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、答えよ。

イ　人の生死をめぐる倫理への問いは、観念的な「生命」を実体的なものと前提したうえで、その質や価値について論じるべき性質のものである。

ロ　人の生死をめぐる倫理への問いは、「生命の本質」を探る「生命のフェティシズム」を土台に、新たな生命科学や生物学の知見を取り入れて論じられる必要がある。

ハ　人の生死をめぐる倫理への問いは、例えば、安楽死の是非に見られるような人間の尊厳にかかわる問題であり、個々の「生命」について論じるレベルの問題ではない。

ニ　人の生死をめぐる倫理への問いは、抽象的な「生命」ではなく、「生きている」他者が「誰か」であるような個々具体的な関係性に基づいて論じられなければならない。

ホ　人の生死をめぐる倫理への問いは、人の生死をめぐって我々がいかなる態度を取るべきかを方向づけるものであり、「生命倫理」の枠組みを早急に構築することが望ましい。

問八　空欄［I］に入る最も適切な語を、次のイ～ホの中から一つ選び、答えよ。

イ　原初　　ロ　人称　　ハ　観念　　ニ　典型　　ホ　直観

問九　本文の趣旨と合致しないものを、次のイ～ホの中から一つ選び、答えよ。

イ　私たちは何かを、それに向かって呼びかけることが無意味ではないような対象、すなわち「誰か」として見出すことにおいて、「生きている」という動詞の使い方を学ぶ。

ロ　人工生命を殺すことにはためらい一つ持たない人々が、人間と言葉を交わすロボットが死ねば悲しむというのは、「生命」とは別の次元で「生きている」ことを実感しているからである。

ハ　「生命」という名詞で表される抽象観念こそが生き物の本質であり、私たちが何かに触れて感じる「生きている」という動詞は単なる現象形態にすぎない、という見方には賛同できない。

ニ　すでに大人である私たちは、何かが「生きている」か否かという知識を無視することはできないため、ぬいぐるみはもちろんのこと、飼い犬や死んだ人に語りかけるような行動は生命のフェティシズムとみなされる。

ホ　「鼠は生き物だが、消しゴムは生き物ではない」という前提のもとで、さらにその生物である鼠が「生きている」のか「死んでいる」のかと判断するのであって、無生物に対していきなり「消しゴムは生きていない」と表現する大人はあまりいないだろう。

（次ページより解答欄）

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a					C
b					D
					E
					F
					G
					H

問七

問八

問九

解答解説

第一講　早稲田大学　過去問演習①　解答

問	解答
問一 a	イ
問一 b	ニ
問二	ニ
問三	ホ
問四	イ
問五	ハ
問六 C	ロ
問六 D	ハ
問六 E	ハ
問六 F	イ
問六 G	ハ
問六 H	ロ

問七　ニ

問八　ロ

問九　ニ